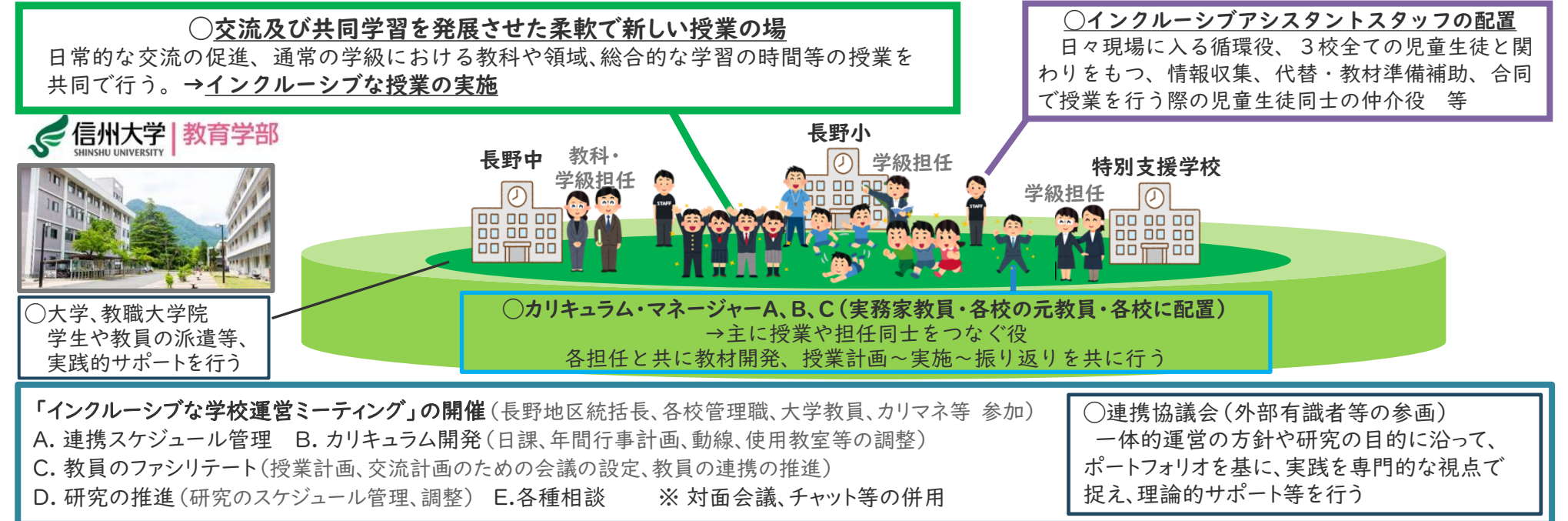


目的・目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 「共に在る、豊かな社会を切り拓く子ども」を育てる ● 通常の学級の中で知的障害のある児童生徒とない児童生徒が互恵的に学ぶための条件を明らかにする ● 汎用性のあるインクルーシブな学校運営モデルを提案する
-------	---

学校運営連携校	信州大学教育学部附属特別支援学校 (対象:知的障害) 信州大学教育学部附属長野小学校 信州大学教育学部附属長野中学校	併設型	カリキュラム・マネージャー	A:元学級担任(国語科研究主任)、実務家教員(長野中) B:元学級担任(主幹教諭、全校研究主任)、実務家教員(長野小) C:元学級担任(全校研究主任)、実務家教員(特別支援学校)
---------	---	-----	---------------	---

事業1年次の取組概要、成果・課題	<ol style="list-style-type: none"> ① 多様な集団で学ぶことを通して、学びの広がり・深まりとともに、相互に関わり合いながら関係性を形成する姿があらわれた ② 教員の協働による授業づくりが進み、インクルーシブな実践の広がりが見られ始めた ③ 3校連携による研修や参観を通して、学校種を超えた相互理解や共通認識の形成が見られ始めた ④ 教育課程上の位置付けの明確化や互恵的学びの成立条件の整理、持続可能な体制構築が今後の課題である
------------------	--

取組概要(事業2年次)



①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

【方向性】

R6年度の実践を基盤に、児童生徒同士が継続的に関わり合う中で関係性の形成と深化を目指した。教科等のねらいを明確に位置付けた実践へと発展させるとともに、単元の一部を共同実施する等、活動内容や手立てを工夫し、多様な児童生徒が互恵的に学び合うことを目指した実践に取り組んだ。

【実施した授業の一部】

長野小3年生と特別支援学校にじ組(高学年学級)【全22回】

主な内容:もなちゃん(羊)をきっかけとした出会いを基盤に、相互に行き来しながら、継続的な交流及び共同学習を展開した。遊びや行事、日常的な関わり、生活単元学習や教科(国語・社会・理科・算数等)と関連付け、共に活動する中で学びを深めた。指導内容や指導方法の工夫:児童の興味・関心や関係性、実際の活動における姿を基に単元を構想するとともに、教科等のねらいを位置付けた。活動内容や手立てを柔軟に工夫し、継続的な関係性の中で学びが深まるよう働き掛けた。

長野中3年生と特別支援学校中学部1~3年生【全11回】

令和6年度に培った関係性を基盤に、新たなペアで交流及び共同学習を継続し、生活単元学習を軸とした構想・制作・発表を通して、相互理解や関係性の深化、学びの広がりや価値観の変容につながった。指導内容や指導方法の工夫:共通の目的や活動を基盤に学習を構想するとともに、協働的な活動を位置付け、活動内容や手立てを工夫しながら、相互の関わりの中で学びが深まるよう働き掛けた。

長野中1年生と特別支援学校中学部1年生(保健体育・音楽)、長野中2年生と特別支援学校中学部3年生(保健体育)【全6回】

主な内容:保健体育や音楽等の教科を窓口に、双方の教育課程や単元に位置付けながら交流及び共同学習を実施した。体ほぐし運動や器楽アンサンブル、ダンス等の活動を通して、互いに関わり合いながら協働的に学ぶ姿が見られた。単元の中で効果的なタイミングを捉えて交流を位置付けることで、学びの広がりや深まりにつながる可能性が示された。指導内容や指導方法の工夫:事前の理解形成や視覚的支援を行うとともに、全ての生徒が参加しやすい活動を設定し、役割や表現の工夫を通して相互の関わりが生まれるよう働き掛けた。



②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

■インクルーシブな学校運営ミーティングを中心とした事業ガバナンス

3校管理職やカリマネ参加のインクルミーティングを軸に、方針共有・進捗管理・横断調整を行い、3校の一体的な事業推進と合意形成の円滑化を図った。

■教員や専門スタッフの配置等の工夫

担任に加え、カリマネやインクルスタッフに関わる体制を構築し、協働的に授業づくりを進めた。役割分担により負担を軽減し、学び合う場を支えた。

■学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

各校の専門性(教科指導、授業構成、児童生徒理解等)を生かし、協働的に授業構想を行った。教員の相互乗り入れや事前授業により、児童生徒の見通しや意欲、相互理解の形成を促進した。

■各学校における校内体制の構築

小中学校では校務分掌の新設、特別支援学校では既存分掌の機能強化により、組織的な推進体制を整えた。

■教員研修

3校連携合同研修会や授業参観、意見交換を通して、学校種を超えた相互理解と実践知の共有を図った。非同期の情報共有も取り入れ、実践への還元を進めた。3校の共通基盤の理念の策定を行った。



本事業の成果（事業2年次）

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方

各実践を整理すると、発展的な交流及び共同学習においては、互いの存在を知り、体験や感情を共有する中で、共に活動することへの期待が高まり、次第に子ども自身が共に学ぶ意義を感じていく過程があることが見えてきた。

また、この過程を支えていた条件として、次の3点が見えてきた。

- ・子ども同士の関係性を支える基盤：各学級で、互いを知り、関心を向け合い、尊重し合える関係性や雰囲気形成されていること
- ・関わりを促す学習活動の設計：グループ活動や共通教材、活動の流れや場の工夫が、自然なやり取りと関係形成を支えること
- ・教師の関わり：教師が子ども同士のやり取りを尊重しながら、必要に応じて言葉を補ったり、意味を共有したりすることが、理解と関係の広がりや深まりにつながる



こうした条件のもと、異なる教育課程に基づく児童生徒同士であっても双方のねらいが達成されうることも、また、生活や関係性に根ざした文脈づくりや、子ども同士が関わる必然性のある課題・問い・教材の工夫が、互恵的な学びを支えるうえで有効であることが示された。

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

- ・各校の教員、カリマネ、インクルスタッフがそれぞれの専門性を生かして協働することで、授業の構想・実施・振り返り・改善を継続的に支える運用の具体が見えてきた。
- ・対面での協議と非同期の情報共有、校内体制の整備を組み合わせることで、実践を特定の学級や教員に依存させず、事業を継続・拡張していく体制づくりの方向性が見えてきた。
- ・ミニ公開研究会には全国から40名以上が参加し、本取組の実践の活用可能性や普及可能性が示された。



前年度からの 変化・改善点

- ・発展的な交流及び共同学習において、教科を窓口とした実践が拡充し、単元内での位置付けの工夫や実施回数の増加を通して、日常的な実践へと広がりつつある。加えて、共に学ぶ意義を踏まえて授業を構想する視点が、教員間で共有されてきた。
- ・児童生徒や教員の発意による授業や行事が生まれ、共に学ぶ実践が広がるとともに、日常の教育活動の中に位置付きつつある。

課題

今後の展望

- ・発展的な交流及び共同学習を、特定の学級・教科にとどまらず、日常的な学びとして広げていく必要がある。今後は、これまでに培ってきた3校の関係性や実践を基盤に、交流籍の導入等を通して実践の広がりを図る。
※ 交流籍：特別支援学校の児童生徒が小・中学校の同学年学級にも籍を置き、授業や生活において、学級の一員として共に過ごす独自の取組。
- ・交流籍の実施に当たっては、形式的な交流に陥らないよう留意し、事前学習や対話を通して安心感と納得感のある関係形成を図る。
- ・今後は、児童生徒の生活や関係性に根ざした授業構想を重視し、共に学ぶ必然性のある文脈や問いを丁寧に設定することにより、互恵的な学びの質の向上を図る。
- ・3校連携による学校運営モデルの具体像は見え始めてきたが、その汎用可能性の検証と精緻化は今後の課題である。
イタリアのフルインクルーシブ教育の視察から得た知見も踏まえつつ、長野3校の文脈に即して実践を発展させ、全国の公立学校にも資するモデルとして展開していく。